

# 馬具・刀剣からみた 中原4号墳の被葬者像

中原4号墳の出土遺物は、遺物の出土位置や時期的位置づけの分析によって、6世紀後半と6世紀末～7世紀初頭のものに区分できます。当古墳の被葬者は人骨の出土位置から3人と想定されますが、馬具と刀剣類は初葬者（6世紀後半）と追葬者（6世紀末）に副葬されたものであることがわかりました（図1、富士市2016）。

ここでは数多くの出土遺物の中から馬具と刀剣を取り上げ、中原4号墳の被葬者像について考えます。

## 1. 馬具からみる被葬者像

馬具は、図1のとおり、鉄製環状鏡板付轡（以下、  
円環轡）と木製壺鑓の吊金具、帶金具、銛具（バックル）  
です。この種類の轡は装飾性が乏しく、報告書などでは  
鉄製轡として一括して扱われることもありますが、立聞  
の有無や種類、鏡板・引手・銜の連結方法等によって複  
数種類に区分できます。中原4号墳から出土した轡はよ  
く見ると、小さな方形の立聞がつくものと、兵庫鎖が取  
り付くもの、大型の立聞が取り付くものの3者があり、  
全く同じものが3点副葬されたわけではないことがわ  
ります。ではこの形態的な違いに意味があるのか、それ  
ぞれの特徴を分布などからみてみたいと思います。

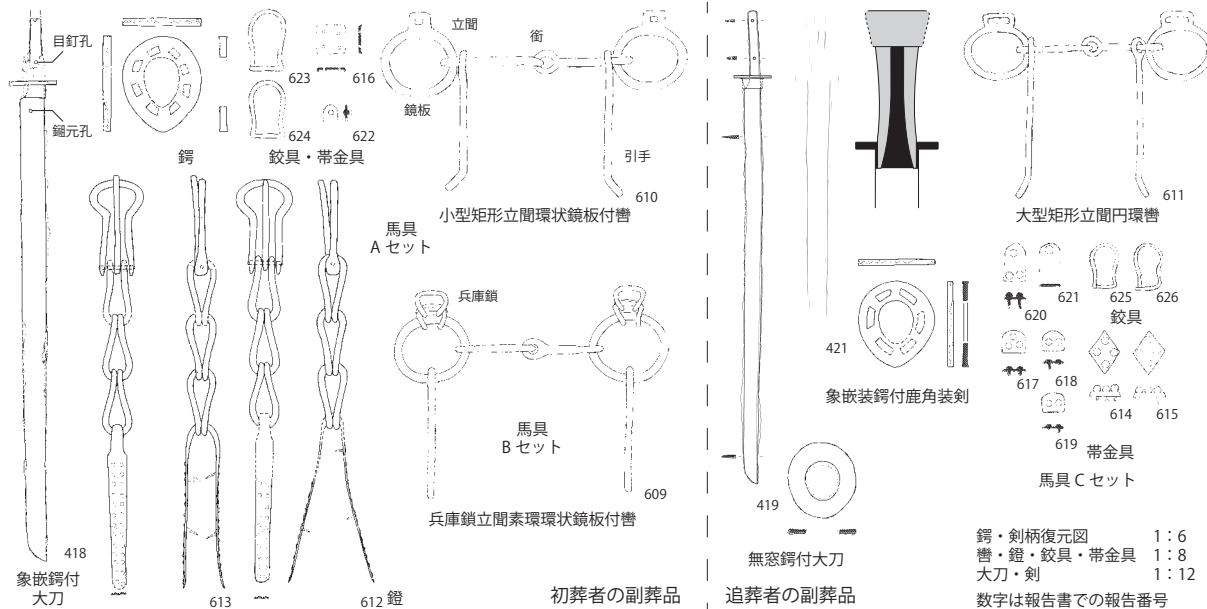


図1 初葬者・追葬者に副葬された刀剣と馬具



出土で近畿地方で変遷が追えることから畿内王権から配布されたものと考えています（大谷 2016）。

このように馬具からみると初葬者は鍛冶技術などをもって畿内王権と結びつきをもっていたと考えます。

一方、追葬者に副葬された大型矩形立聞円環轡は、6世紀後半以降日本列島で最も多く出土する轡のひとつで、東駿河で最も多く出土する轡のひとつです。上記の2者が東駿河では唯一の事例であるのに対し、大型矩形立聞円環轡は東駿河で一般的な轡です（図3）。また、大型矩形立聞円環轡は、馬具が多く出土し、牧の存在が推定される群馬、長野、山梨で多く確認されるため、東駿河にも牧がおかれた可能性が考えられます。さらに、<sup>こんどうそう</sup>鉄製轡は金銅装轡より実用的な馬具と考えられ、大型矩形立聞円環轡は規格性が高く、生産地が限られたか、畿内王権からの見本をもとに地方で生産された可能性が想定されます。それらが集中する東駿河は、王権に直属する騎馬軍団が存在した可能性が想定されています（岡安 1986）ので、追葬者は、東駿河の他集団と規格性の高い轡を共有し、王権の軍事的な側面を担ったと考えます。

**階層的位置** 中原4号墳では3種類の轡が出土し、それぞれで特徴が異なることを明らかにしました。しかし、一方で3者に共通するのは、<sup>つじかなぐ</sup>辻金具・<sup>う</sup>雲珠や杏葉という装飾性の高い馬具を有さないことです。中原4号墳の出土馬具からどのように馬に装着していたかを図4に復元しました。顔の部分（面繫）のみに金属製の馬具を用いる簡素なもので、「面繫馬装」と呼ばれることもあります。同時期の県内の古墳である、掛川市宇洞ヶ谷横穴墓や静岡市賤機山古墳では、豪華な金銅装馬具が副葬されています。このように同時期の古墳と比較すると、馬具の材質や種類などから階層的には上位に位置づけることはできないことがわかります。

**3組の馬具からみた被葬者像** 中原4号墳のように鉄製轡を3組も有する古墳は国内を見渡しても多くはなく、県内では最上位の古墳である賤機山古墳に次ぐ多さです。宮代栄一氏は小規模でありながら鉄製馬具を複数副葬する古墳は馬具が多く出土する長野県に多いことから馬匹生産を担った集団と関係する（宮代 2015）と指摘していますので、3組出土の中原4号墳の被葬者集団は馬匹生産にも関係していたことが想定されます。

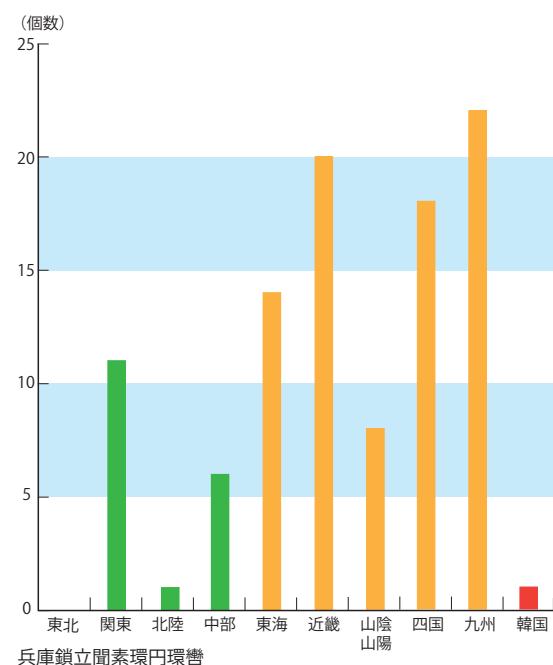
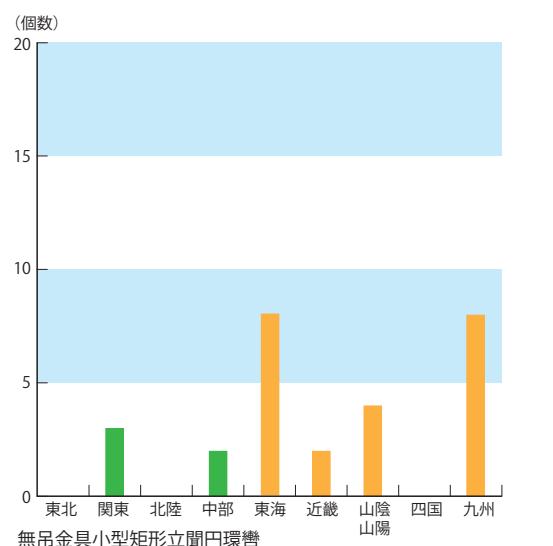


図2 初葬者に副葬された轡の分布

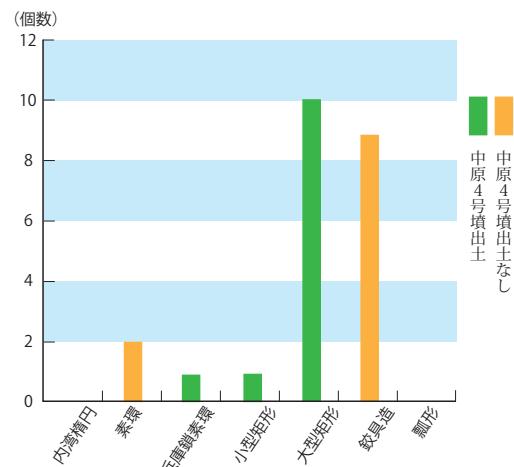


図3 東駿河の環状鏡板付轡の種類別出土数

